



核兵器廃絶市民講座

核時代の文学

—偽の語り部と小説の真実—

長崎大学核兵器廃絶センター客員教授
作家 青 来 有 一

原爆文学

原子爆弾の投下によって生じたさまざまな悲惨な出来事を題材とする文学。

(ブリタニカ国際大百科事典)

原民喜

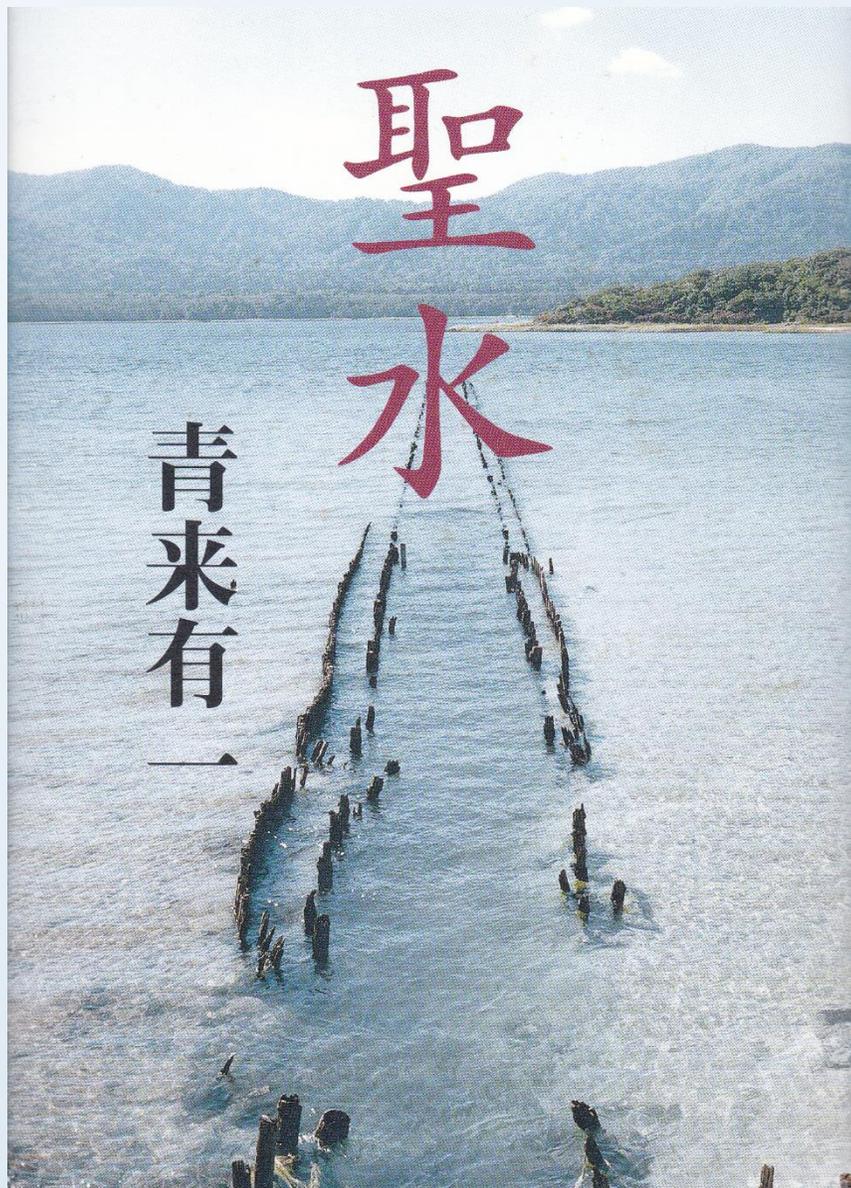
「夏の花」

大田洋子

「屍の街」

林京子

「祭りの場」



聖水

青来有一



爆心
青来有一

釘
5

鳥
241

石
31

目次

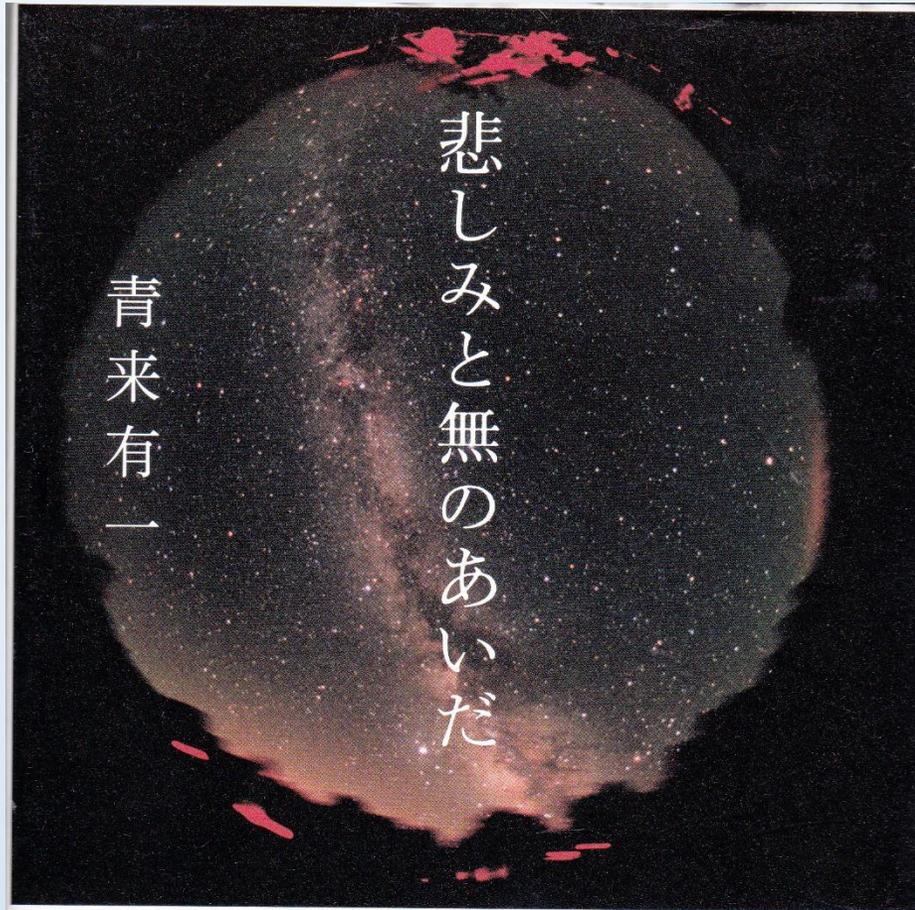
貝
179

虫
81

123
蜜

林京子略年譜

西暦（和暦）	満年齢	主なできごと
1930（昭和5）	1歳	8月28日 長崎市で生まれる。 父(三井物産上海支店勤務) 上海移住。
1945（昭和20）	15歳	2月 帰国。県立長崎高等女学校編入。 5月 三菱兵器大橋工場学徒動員。 8月 工場勤務中被爆（14歳）。
1951（昭和26）	21歳	結婚。東京、神奈川居住
1953（昭和28）	23歳	長男誕生。
1962（昭和37）	32歳	同人誌「文藝首都」参加。同期同人 中上健次、津島佑子。
1975（昭和50）	45歳	4月 「祭りの場」第18回群像新人賞 7月 「祭りの場」第77回芥川賞受賞。
1982（昭和57）	52歳	「核戦争の危機を訴える文学者の声明」署名。
	～	「上海」女流文学賞受賞（1983） 「三界の家」川端康成文学賞（1984）
1990（平成2）	60歳	「やすらかに今はねむり給え」谷崎潤一郎賞受賞
2005（平成17）	75歳	「林京子全集」全8巻（日本図書センター）＊
2013（平成25）	81歳	4月 「再びルイへ。」（群像）
2017（平成29）	86歳	2月19日 死去。享年86歳。



悲しみと無のあいだ

青来有一

死者と生者に捧げる
厳粛な祈りと叫び

文藝春秋刊
定価(本体 1400円+税)

収録作
「愛撫、不和、和解、愛撫の日々」
「悲しみと無のあいだ」

愛撫、不和、和解、愛撫の日々



原爆資料館玄関前から平和公園の方へ桜並木の舗道をいくらかくだったところに松尾あつゆきの句碑があります。爆心地の公園を見下ろす崖のふちに巨大なおむすびを少し潰したような自然石がでんとすえられ、ざらついた表面に太い筆文字書体で、「降伏のみことのり 妻をやく火いまぞ熾りつ」と刻まれ、さらにかたわらにはもうひとつぴかぴかに磨かれたグレーの御影石の句碑がならび、「松尾あつゆき 著 原爆句抄 より」として、次の七句が刻まれています。

すべなし 地に置けば子にむらがる蠅
かぜ、子らに火をつけてたばこ一本







「偽の語り部」



想像は経験に代わりうるか。

林京子の小説と次世代作家への希望（インタビュー抜粋）

- 1 ぜひ、外から見て、自由に書いて欲しい。
- 2 どんな形でも新しい書き手がどんどん出てくるのが大切で、それが伝えていく、忘れないということだと思う。

『戦争へ、文学へ「その後の」の戦争小説論』
陣野俊史（集英社）2011年

すばる

Subaru
September
2018

堀田善衛

全集未収録原稿再録

「上海・南京」

(1945年)ほか

解説
秦剛

エッセイ

四方田犬彦

小説
島田雅彦

君が異端だった頃 第二部

いくつかの事件

小説
椎名誠

すばるクリティーク賞受賞第一作

近本洋一

括弧に入れられた「心」

評論

佐々木敦

濱口竜介論

小説
青来有一

フエイクコメディ

新連載

武田砂鉄

マチズモを削り取れ

対談

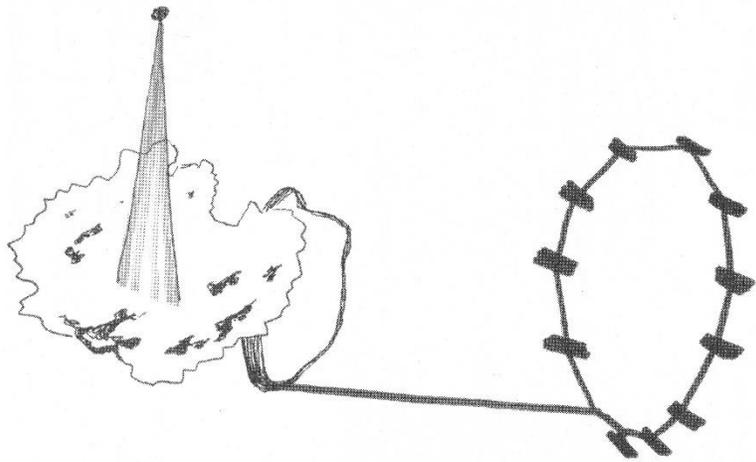
長島有里枝+武田砂鉄

フェミニズムと「第三者の当事者性」

Nanking Road in Shanghai

フエイクコメデイ 青来有一

五月の光を感じるとうすも色のマロニエの花の思い出がよみがえってくる。柔らかな花びらが新緑の枝葉とたわむれて、爽やかな風にゆれていた。桜がすべて葉桜になり、サツキやツツジの花の盛りを越えて、ぼつぼつとコーヒーをこぼしたようなしみがひろがってしほみはじめたころ、あの花は初夏を感じさせる光にほどけはじめたのだ。十三年まえ、長崎原爆資料館に勤務するようになったころ、大型バスの通路となっていた南側の玄関前に、九本のマロニエの樹が三本ずつ三列に、ほぼ正方形をなすようにならんで植えられていた。花の時期が終わっても春から夏、秋にかけて化粧タイルでおおわれたそのエリアは、高



さが三、四メートルほどの樹々が心地よい木陰をつくり、造りつけとなっていたモダンな石の椅子に腰をおろして、くつろいでいる人々のすがたをよく見かけた。世界中から訪ねてきてくれたいろんな肌の色の人々、文化もちがえば言語もちがう人々、年若い人も老いた人も、路面電車を降りていたらだと続く坂道を登ってきて、初めに目につくマロニエの小さな木陰は、一息つくことができるちょっとしたオアシスになっていた。

三年ほどが過ぎて——わたしがまだ館長に昇任する前のことだったが——、マロニエの花の数がなんとなく少なくなってきたなあ、と感じていたら、枝葉の勢いが衰えはじめ、やがて秋の大風に煽られ、一本が根元からぼきりと折れた。断面を見たらぼろぼろと腐食している。専門家に調べてもらったら、シロアリのしわざで残りもいつ倒れてもおかしくないといわれ、伐採するしかなくなった。マロニエが次々に伐り倒されていく光景をぼんやりながめていたことをおぼえている。

幹の太さが十センチメートルほどしかない樹は、樹皮一枚下はすかさずかのムシクイの状態で、チェーンソーがわずかに喰った次の瞬間にはもう倒れる——、というよりも踵を踏みはずすように木全体は立っただまますとんと切り株から落ちる。作業をする人は、軍手をした腕とたくましい肩で幹をとらえて、そのまま倒すことなく枝を打ち払い、細

かく切断していった。化粧タイルで舗装したエリアには、今でもマロニエを植えていた九つの丸い穴が残っていて、ライトアップ用の照明設備に、アイビーがあふれんばかりにからんでいる。あのときから自分の内に生えていた樹木のようなものが踵をすべらせるようにして音もなく倒れていく光景をぼんやり思い浮かべられるようになった。

来年三月、わたしは定年をむかえる。三十代のなかばから公務のかたわら、物書きとして小説を書くようになり、これからようやく自由を書くことができるという待ち遠しさが大きいのだが、マロニエのないほっかりとひらけた玄関前の空間に立つたび、なすべきことを成し遂げることができないまま、歳月ばかりが過ぎたという苦々しさもわいてくる。なにも音のしない、ほんとうの静寂がだんだんとわたしの内にひろがっていくように感じている。

あの朝も夢の浅瀬では、マロニエのうすも色の花の陰にいて木漏れ日がゆれるのを感じていたのだ。まだ六時前、めざまし時計より早く目覚めた。わずかに開いたカーテンのすきまからもれる光がちょうどまぶたを温めて記憶をくすぐっていたのかもしれない。

眠るにはもう時間もなく、春の朝の時間をたのしみたくて、玄関のドアにさしこんである新聞を手にしてリビングのソファに座った。新聞の一面には米朝首脳会談を危ぶむ



(トランプ大統領)

——この施設は申し分がない……、小さいがすばらしい展示ではないか。ナガサキのこの原爆資料館を、どうだろう……、マンハッタン計画の関連施設を国立公園にするという計画があっただろう？ わが国でここをそっくり買い取って、その関連施設のひとつにくわえるのはどうだろうかね。ヒロシマの資料館もできればいっしょに買収して、マンハッタン計画を永遠に歴史にとどめる場所にするのだ。わが国の科学技術の圧倒的な勝利と、核兵器の恐るべき破壊力を顕彰して……、アメリカの偉大さを他国に誇るのだ……

(原爆資料館長)

わたしはただもう唾然として、そのままぶっ倒れてしまいそうだった。そうじゃないのだ、それはちがう、この資料館は核兵器の破壊力を讃えるためにあるのではない。(中略)ここは核兵器の威力を誇る施設ではない、その恐ろしさを伝える施設なのだ、アメリカの偉大さを讃える施設でもなく、人類の未来への警鐘となる施設であって、わたしはその館長なのだ。

「小説の真実」



「荒唐無稽の物語の現実世界との接点」

核兵器廃絶市民講座

核時代の文学

偽の語り部と小説の真実—

長崎大学核兵器廃絶センター客員教授
作家 青 来 有 一

